

(2)1933年の所感

満洲事変から2.26事件に至る時期における丸山の政治的立場を示す資料として、1933(昭和8)年1月下旬に執筆された所感がある。これによれば、それまでの丸山は、国家主義・ナショナリズムと結びついた社会主義である国家社会主義に「多大の同情」を有していた。しかし、満洲事変以降の対外膨張と軍国化の進展は、こうした現実に対して国家社会主義が批判力をもちえないことをあらわにした。国家社会主義者は、「国家」の名において行われる行動をすべて是認し、ついには社会主義そのものをかなぐり捨て、「純粹日本主義」に屈服してしまったのである。社会主義の立場を維持するには、少なくともその実現をめざす闘争の過程では、あくまでもインターナショナリズムの旗を掲げなければならない、というのがこの所感の結論であった。それまで空想的と考えていた国際社会主義の意義を見直すようになっていたのである(画像:丸山眞男「一高時代 1933年の手記 1月下旬」〈丸山文庫草稿類資料517-1〉)。

